

着装イメージに関与するきものと袴の色彩要因

石原久代・神谷綾子*・加藤千穂

The Color Factor to be Involved in the Image of the Person wearing a KIMONO and HAKAMA

Hisayo ISHIHARA, Ayako KAMIYA* and Chiho KATO

緒 言

袴は、現在に至るまで社会の変化、生活様式の変化などにより様々な変遷を経てきた。女子における袴は、飛鳥・奈良時代に貴族の女子が下着として用いていた¹⁾が、平安時代以降は貴族が外衣として着用したとされている。鎌倉時代以降、女子の袴は衰退していったが、明治時代になり、宮中の婦人の制服として取り入れられ、一般の女子が袴を着用するようになった。こうした女子の袴着用は昭和初期まで続くが、洋服が普及したため袴は急速に衰退し、現在では女性教師や女子大学生が卒業式に着用するなど、限られた場面での着用となっている。しかし、卒業式での女子学生の袴姿は、見事な優美さを出し、卒業式独特の服装として大きな存在感を示している。

このように、現在において袴は、ごく限られた場面にはしか着装されないこともあり、これまで着装イメージや色彩調和を検討した研究はほとんどみられない。しかし、きものだけでなく、袴も日本の民族服、伝統衣装として今後も永く継承されていくべきものであると考えられる。

そこで、本研究では卒業式で多く着られるきもの²⁾と袴を取り上げ、若い女性における視感評価をもとに、着装イメージに関与する色彩および柄の要因について解明し、きものや袴の選択およびコーディネートの手がかりを探ることを目的として研究を行った。

方 法

1. 袴に関するアンケート調査

現代において、一般女性の袴の着用機会は限られていることから、被験者は卒業式などの機会に袴の着用が考えられる女子大学生100名(19~21歳)とした。

アンケートは、和服の種類認知度、和服の着用経験の有無、過去における和服着用の機会、袴の着用経験の有無、今後和服を着たいか、卒業式の服装は何を着用したいと考えているか、卒業式の服装はどのような手段(レンタル・購入など)で調達するか、袴を着用する場合、履

* 名古屋女子大学大学院生活学研究科修士課程

物は何を着用するかなどの項目について回答させた。

また、本研究が和服の色彩要因を検討することが目的であることから、対象を限定しない嗜好色、着てみたいきもの色彩および袴の色彩について、1位から3位までを回答させた。色彩の選択にあたっては、表1に示したような日本色研配色体系(PCCSカラーハーモニックカード)のv, lt, dkトーンの偶数番号と無彩色のW, Gy5.5, Bkおよび金, 銀の41色のカラーチャートを用いた。アンケートは2006年5月に集合調査法により行った。

なお、各嗜好色については、選出された色彩について、1位は3点、2位は2点、3位は1点を与えて点数化し、集計した。

2. 官能検査によるイメージの検討

1) 実験試料の作成

試料は、きものの柄の影響も考えられることから、図1に示したような比較的柄の少



図1 着装写真

表1 アンケート用カラーチャート

No	PCCS記号	色名	マンセル記号
1	v 2	さえた赤	4 R 4.5/14.0
2	v 4	さえた赤みの橙	10R 5.5/14.0
3	v 6	さえた黄みの橙	8 YR 7.0/13.5
4	v 8	さえた黄	5 Y 8.0/13.0
5	v10	さえた黄緑	3 GY 7.0/12.0
6	v12	さえた緑	3 G 5.5/11.0
7	v14	さえた青緑	5 BG 4.5/10.0
8	v16	さえた緑みの青	5 B 4.0/10.0
9	v18	さえた青	3 PB 3.5/11.5
10	v20	さえた青紫	9 PB 3.5/11.5
11	v22	さえた紫	7 P 3.5/11.5
12	v24	さえた赤紫	6 RP 4.0/12.5
13	lt 2	浅い赤	4 R 7.0/8.0
14	lt 4	浅い赤みの橙	10R 7.5/8.0
15	lt 6	浅い黄みの橙	8 YR 8.0/8.0
16	lt 8	浅い黄	5 Y 8.5/7.5
17	lt10	浅い黄緑	3 GY 8.0/7.0
18	lt12	浅い緑	3 G 7.5/6.0
19	lt14	浅い青緑	5 BG 7.0/6.0
20	lt16	浅い緑みの青	5 B 6.5/6.0
21	lt18	浅い青	3 PB 6.0/7.0
22	lt20	浅い青紫	9 PB 6.0/7.0
23	lt22	浅い紫	7 P 6.0/7.0
24	lt24	浅い赤紫	6 RP 6.5/7.5
25	dk 2	暗い赤	4 R 2.5/6.0
26	dk 4	暗い赤みの橙	10R 3.0/6.0
27	dk 6	暗い黄みの橙	8 YR 3.5/6.0
28	dk 8	暗い黄	5 Y 4.0/5.5
29	dk10	暗い黄緑	3 GY 3.5/5.0
30	dk12	暗い緑	3 G 3.0/4.5
31	dk14	暗い青緑	5 BG 2.5/4.5
32	dk16	暗い緑みの青	5 B 2.5/4.5
33	dk18	暗い青	3 PB 2.0/5.0
34	dk20	暗い青紫	9 PB 2.0/5.0
35	dk22	暗い紫	7 P 2.0/5.0
36	dk24	暗い赤紫	6 RP 2.5/5.5
37	W	白	N9.5
38	Gy5.5	灰	N5.5
39	Bk	黒	N1.5
40	金	金	
41	銀	銀	

ないきものを着用したAと、柄の多いきものBの2種類の袴姿の着写を用いた。これらの画像を4D-box(株)トヨシマビジネスシステムにて、先のアンケートにおける嗜好色の結果をもとに色彩変換を行った。変換色は、きものがv2, v8, v18, lt2, Wの5色、袴がdk2, dk8, dk12, dk18の4色とし、両者を組み合わせた20種のコーディネート画像を作成した。なお、きもの、袴とも柄の色彩は各変換色の同一色相、明度・彩度は入力画像の数値を保持して作成した。呈示試料は表2に示したように柄A・B合わせて計40種である。

2) 実験方法

上記の40試料を1試料ずつ液晶プロジェクターでランダムに提示し、「派手な—地味な」「個性的な—平凡な」「重い—軽い」「着てみたい—着たくない」「柔らかい—硬い」「フォーマルな—カジュアルな」「若々しい—年寄りっぽい」「暖かい—冷たい」「男性的な—女性的な」「上品な—下品な」「都会的な—田舎的な」「好きな—嫌いな」といった着装イメージに関する12形容詞対についてSD法³⁾による5段階評定の官能検査を行った。なお、これら12対の用語は既報⁴⁾の振袖に関する研究に使用した用語と同じである。被験者は、先のアンケートの被験者とは異なる本学学生75名(20~22歳)、実験実施時期は2006年11月、検査は途中5分のインターバルを1回入れて行った。

得られた5段階の結果に5~1点を与え数値化し、因子分析を行い、因子構造を明らかにするとともに、因子得点により各因子に寄与する要因について検討した。さらに、各イメージに関与するアイテムを検討するために数量化I類を用いて着装イメージに関与する各要因を検討した。

表2 官能検査試料

No	柄	きもの色	袴の色
1	A	v2	dk2
2			dk8
3			dk12
4			dk18
5		v8	dk2
6			dk8
7			dk12
8			dk18
9		v18	dk2
10			dk8
11			dk12
12			dk18
13		lt2	dk2
14			dk8
15			dk12
16			dk18
17		W	dk2
18			dk8
19			dk12
20			dk18
21	B	v2	dk2
22			dk8
23			dk12
24			dk18
25		v8	dk2
26			dk8
27			dk12
28			dk18
29		v18	dk2
30			dk8
31			dk12
32			dk18
33		lt2	dk2
34			dk8
35			dk12
36			dk18
37		W	dk2
38			dk8
39			dk12
40			dk18

結果および考察

1. 袴に関するアンケート調査

和服の認知度についてのアンケート結果を図2に示した。振袖の認知度が最も高く98%、次いで浴衣が97%とほとんどの被験者が知っている。袴についても83%の被験者が知っているという回答している。

また、和服の着用経験について、図3にアイテム別の集計結果を示した。浴衣が最も多く92%、次いで七五三の衣装が83%と、これら2アイテムは非常に多いが、3位の振袖では42%と半数

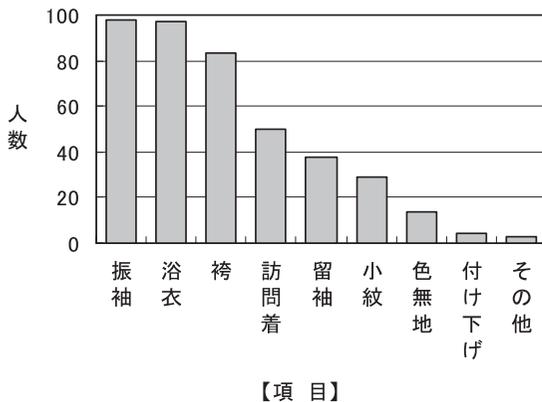


図2 和服の認知度

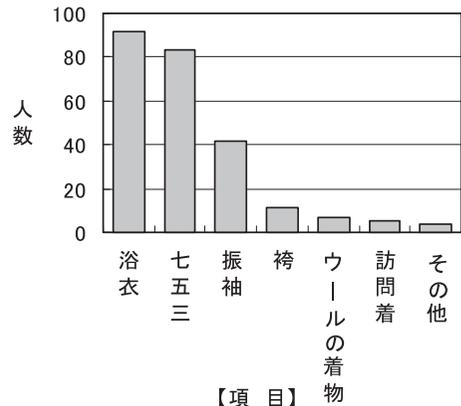


図3 和服の着用経験

以下になっている。この理由として今回のアンケートの被験者が19~21歳といった大学2年生および3年生であり、アンケート実施が6月であったことから2年生については、1月の成人式の前であり、そのため人数が少なかったと考えられる。なお、袴の着用経験については11%であり、認知度の83%に比べて着用率はかなり低いといえる。

また、これからも和服を着用したいかについては97%が「はい」と回答しており、具体的な着用機会としては、図4に示ように卒業式が94%と最も多かった。本調査の被験者は卒業学年

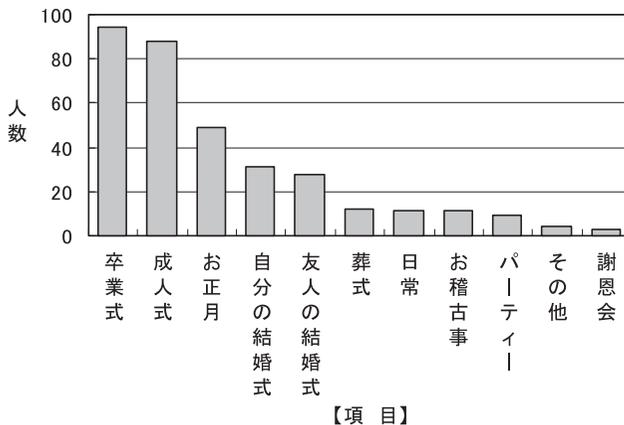


図4 今後の和服の着用機会

ではないものの、卒業式には和服を着用するというイメージが出来上がっているものと考えられる。しかし、卒業式に着用する衣装の

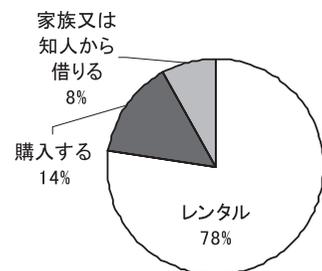


図5 卒業式の衣装の調達方法

調達方法については図5に示したように、「レンタル」と回答している人が78%と非常に多く、「家族や知人から借りる」を含めると86%が借りると回答しており、合理性が窺える結果であった。

なお、袴に組み合わせる履物について、数年前は編み上げブーツの着用が非常に多かったが、今回の調査においては、草履が76%とブーツの22%（無回答2%）に比べ圧倒的に多かった。この理由としては当時流行した少女コミックの主人公の女学生が袴姿にブーツを着用していたことの影響や、編み上げブーツそのものの流行の影響があったと考えられる。特に最近のレンタル事情から草履、バック、写真撮影に至るまでセットで提供され、ブーツの場合は自前になることや、学内でレンタル業者が配布しているポスターやカタログのほとんどで草履が着用されている点からこのような結果になったと思われる。

次に、嗜好色についての集計結果を表3に示した。

表中の得点は3位までの回答結果について1位に3点、2位に2点、3位に1点を与え、全被験者の得点を合計したものである。対象を限定しない色票としての嗜好色の場合、1位はBk(黒)があがったが、2位にlt24(浅い赤紫)、3位にW(白)、4位にlt2(浅い赤)と黒以外は高明度の色彩が上位にあがった。

また、きものとして着たい色では、1位はv2(さえ

た赤)、2位にBk、3位にWがあがった。1位のさえた赤については、きもの色彩としてよく使われているが、黒については喪服や留袖など儀礼的な場面では使われるものの普通のきものとしては珍しく、3位の白も花嫁や花婿の衣裳や一部地域の喪服として使われる色であり、どちらも和服では極めて珍しい色といえる。しかし、芸能人や個性的な和服のカタログなどでは時々目にすることから、個性的な装いとして洋服に近い感覚で捉えているのではないかと推察される。なお、4位以下には赤系の高明度、高彩度色が挙がっており、これらの色彩は一般にきもの色として頻繁に使われる色といえる。

袴として着たい色はBkが圧倒的に多く、次いでdk20(暗い青紫)、dk18(暗い青)など寒色系の低明度の色彩が挙がっている。これらの色彩そのものは、嗜好色や着てみたいきもの色とはかなり異なっているがBkやWが上位にきている点で類似している。その理由として、和服へのなじみが浅いことから、きものと袴といった和服独自の配色が想像できず、全般的に洋服と同じコーディネートイメージしているためと考えられる。

表3 嗜好色（アンケート結果）

順位	色票		きもの色		袴の色	
	色記号	得点	色記号	得点	色記号	得点
1位	Bk	76	v2	74	Bk	87
2位	lt24	66	Bk	49	dk20	41
3位	W	51	W	48	dk18	38
4位	lt2	39	lt2	46	v24	37
5位	v8	31	lt24	44	dk22	30
6位	v2	30	v24	40	dk2	26
7位	lt12	23	lt8	26	W	25
8位	v4	19	v22	19	v20	24
9位	lt14	18	v8	16	lt2	22
10位	v6	17	dk20	15	v2	21

2. 官能検査によるイメージの検討

1) 官能検査結果

12形容詞対における官能検査結果をもとに、全被験者の平均官能量を算出した結果を図6に示した。

図中「派手な—地味な」において、最も「派手な」と評価されたのは、柄Aの試料No. 7のv8(さえた黄)のきものdk12(暗い緑)の袴を着用した画像であり、次いで柄Bの同じ配色の画像である。これらの2試料を含め平均官能量が4.0以上を示したのは、全てv8のきものを着用した試料でありv2の赤のきものよりv8の黄の方が「派手な」と評価されている。逆に「地味な」と評価されたのは、柄に関わりなく何れも白のきものを着用した試料であった。

「個性的な—平凡な」について、「個性的な」と評価されたのは「派手な」と同様に柄A・Bとも、袴の色彩に関係なくv8のきものを着用した画像であった。逆に「平凡な」と評価されたのはIt2やWといった高明度のきものを着用した画像であり、低明度の袴の色彩に対して明度が対照の色彩調和といえ、見た目の自然さから面白みに欠け、「平凡な」と評価されたものと考えられる。

「重い—軽い」について、「重い」と評価されたのは、柄に関係なくv18(さえた青)のきものを着用した画像であり、次いで柄Aのv2のきものを着用した画像である。その他の試料はほとんどが「軽い」傾向にあった。なお、最も「軽い」と評価されたのは、白ではなくさえた黄のきものであり、どの袴でもほとんどが白のきものより軽いと評価されている。色彩のみの軽さ感には明度が大きく影響し、高明度ほど軽く評価されることは既に多くの研究で明らかになっているが、今回の実験では白と黄が逆転した結果となった。

「着てみたい—着たくない」について、最も「着てみたい」と評価されたのは、柄BのIt2のきものにdk18の袴の画像であり、次いで柄AのIt2のきものにdk2の袴の画像であった。It2のきものについては全体に「着てみたい」と高い評価を得ているが、dk8の袴では評価は低くなっている。同じくWのきものについても3.0以上の評価となっているが、同じくdk8の袴の場合については柄A・Bともに3.0以下の「着たくない」と評価され、袴の色の関与も認められた。

「柔らかい—硬い」について、最も「柔らかい」と評価されたのは、試料No. 15の柄AのIt2のきものにdk12の袴の画像であった。また、その他の画像においても「柔らかい」と高く評価されているのは、いずれもIt2のきもの試料であった。逆に「硬い」と評価されているのは、v18の寒色系のきもの画像といえる。

「フォーマルな—カジュアルな」において、最も「フォーマルな」と評価されたのは、試料No. 40の柄BのWのきものにdk18の袴を着用した画像であり、次いで柄Aの同じ色彩の画像である。これらの2試料を含め白のきもの着用画像は、「フォーマルな」と評価されているが、dk8の暗い黄の袴を着用した画像は平均官能量が2.79および2.84と3.0以下を示し、「カジュアルな」の方に傾いている。その他の試料においても暗い黄の袴は他の色の袴に比べて「カジュアルな」の評価に寄る傾向を示している。

「若々しい—年寄りっぽい」において、最も「若々しい」と評価されたのは、試料No. 21の柄Bのv2のきものにdk2の袴を着用した画像である。しかし、v2のきものにおいて、際立って高い値を示したのは、このNo. 21のみであり、全体的にはIt2のきもの画像の方が「若々しい」と評価されている。逆に、「年寄りっぽい」と評価されたのは、柄に関わりなく何れも白のきものを着用した試料であった。また、どのきものも暗い黄の袴の着用試料が「年寄りっぽい」傾向にあるといえる。

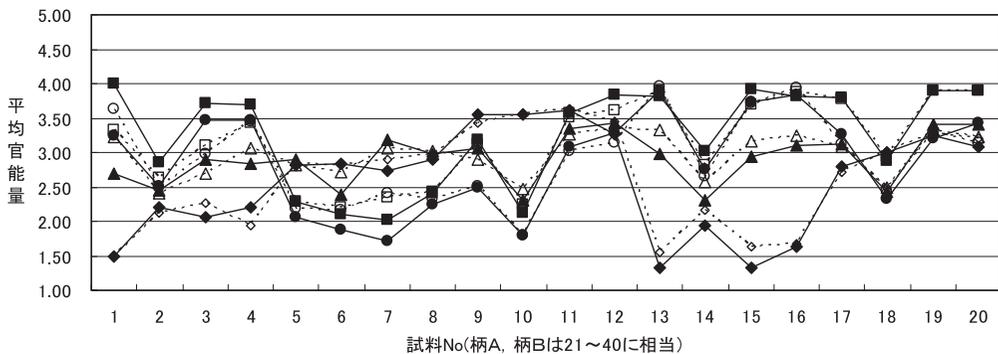
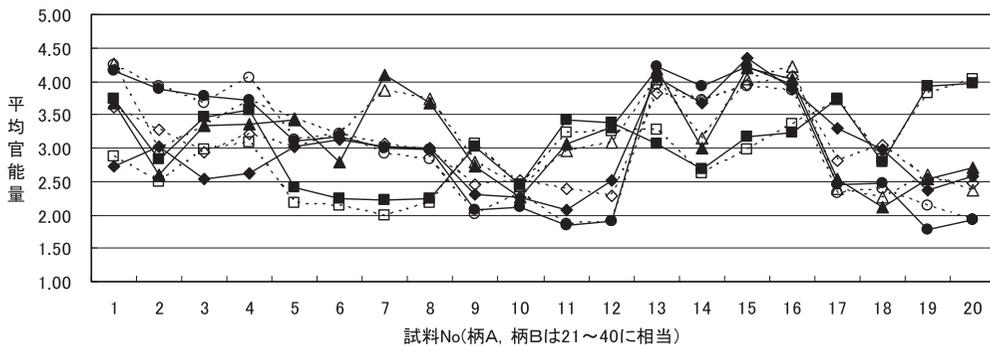
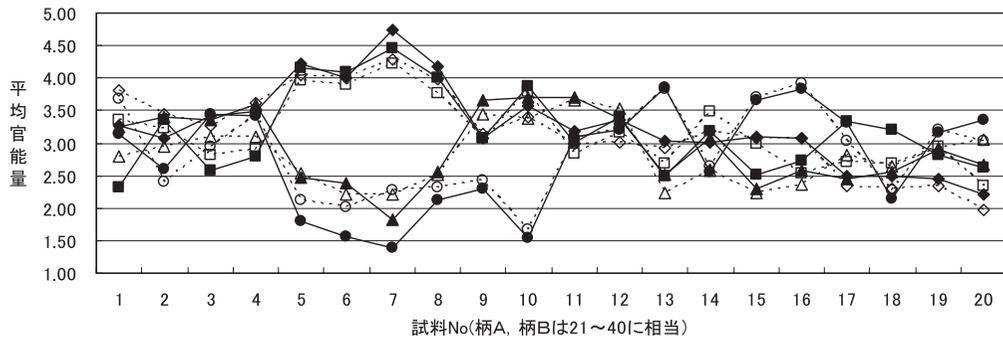


図6 平均官能量

「暖かい—冷たい」において、最も「暖かい」と評価されたのは、No. 21の柄Bのv 2のきものdk 2の袴を着用した画像であり、次いで柄Aのlt 2のきものdk 2の画像と両試料とも暖色系同士の配色であるといえる。また全体的にも、きもの色がv 2, v 8, lt 2の暖色系の試料は「暖かい」、v18の寒色と明度において寒色と評価できる白は「冷たい」と評価されている。

「男性的な—女性的な」において、「男性的な」と評価されたのは、柄A・Bともにv18のきもの試料であり、どの袴の色の画像も「男性的な」と評価されている。逆に「女性的な」と評価されたのは、柄や袴の色に関わりなく何れもlt 2やv 2の赤系のきものを着用した試料であった。

「上品な—下品な」では、「上品な」と評価されたのは、柄に関係なくlt 2や白のきものを着用した画像であるが、その中においてもdk 8の袴を着用した画像は「着てみたい—着たくない」同様、評価が低くなっている。逆に、「下品な」と評価されたのは、柄に関わりなくv 8のきものを着用した画像であり、何れの袴の色も「下品な」と評価されている。

「都会的な—田舎的な」において、最も「都会的な」と評価されたのは、試料No. 12の柄Aのv18のきものにdk18の袴を着用した画像であり、次いで柄AのWのきものにdk18の袴を着用した画像である。これらの2画像を含め、dk18の袴を着用した試料が比較的「都会的な」と評価されている。逆に「田舎的な」と評価されたのは、きもの色が暖色系の高彩度のv 2やv 8の試料が多く、また袴の色がdk 8の試料もどのきものも評価が低くなっている。

「好きな—嫌いな」において、最も「好きな」と評価されたのは、試料No. 33の柄Bのlt 2のきものにdk 2の袴を着用した画像であり、同じ配色の柄Bも高い評価である。これらは色相が同系、明度が対照の配色であり、色彩調和の理論どおりの結果となっている。また、試料No. 16および36のlt 2のきものにdk18の袴を着用した画像も高く評価されており、色相・明度とも対照の調和領域に入っており、この配色も色彩調和の理論どおりといえる。逆に「嫌いな」と評価されたのは、v 8やv18のきもの試料であり、特にv 8についてはどの色の袴と組み合わせても「嫌い」と評価されている。

なお、柄Aと柄Bについてのイメージの差をt検定で検定したところ「男性的な—女性的な」において5%水準で、「フォーマルな—カジュアルな」で1%水準で有意差が認められ、これら2イメージには柄も影響することが明らかになったが、その他のイメージには有意な差は認められなかった。

2) 因子分析結果

因子分析を行った結果を表4に示した。な

表4 因子分析結果 (主因子解法)

形容詞対	FAC 1	FAC 2	FAC 3	共通性
平凡な—個性的な	0.953	0.088	-0.071	0.920
上品な—下品な	0.949	0.059	0.282	0.984
フォーマルな—カジュアルな	0.914	-0.240	0.182	0.926
好きな—嫌いな	0.839	0.385	0.355	0.978
着てみたい—着たくない	0.836	0.364	0.354	0.957
地味な—派手な	0.826	-0.310	-0.205	0.820
暖かい—冷たい	0.029	0.943	-0.191	0.927
女性的な—男性的な	0.283	0.940	-0.079	0.970
柔らかい—硬い	0.048	0.917	-0.027	0.845
若々しい—年寄りっぽい	-0.091	0.786	0.530	0.907
軽い—重い	-0.323	0.582	0.249	0.505
都会的な—田舎的な	0.362	-0.130	0.914	0.984
寄与率 (%)	42.1	33.6	13.6	
累積寄与率 (%)	42.1	75.8	89.4	

表5 数量化I類分析結果

アイテム	カテゴリ	派手な—地味な			個性的な—平凡な			重い—軽い			着てみたい—着たくない		
		カテゴリ 数量	レンジ	単相関 偏相関	カテゴリ 数量	レンジ	単相関 偏相関	カテゴリ 数量	レンジ	単相関 偏相関	カテゴリ 数量	レンジ	単相関 偏相関
デザイン	A	0.030		0.048	0.016		0.028	0.050		0.099	-0.043		0.060
	B	-0.030	0.061	0.167	-0.016	0.031	0.060	-0.050	0.099	0.235	0.043	0.086	0.161
きもの の色	v 2	0.183			-0.265			0.327			0.313		
	v 8	0.943			0.888			-0.532			-0.866		
	v18	-0.027	1.862	0.956	0.092	1.248	0.834	0.693	1.225	0.902	-0.249	1.548	0.738
	lt 2	-0.180		0.958	-0.360		0.876	-0.378		0.911	0.683		0.894
	w	-0.919			-0.355			-0.110			0.119		
袴の色	dk 2	-0.006		0.049	-0.070		0.306	-0.045		0.095	0.129		0.561
	dk 8	0.008			0.294			0.023			-0.676		
	dk12	0.042	0.085		-0.062	0.455		-0.045	0.112		0.180	1.044	
	dk18	-0.044		0.169	-0.161		0.555	0.067		0.226	0.368		0.835
重相関係数		0.958			0.889			0.913			0.929		
重相関の2乗		0.919			0.790			0.833			0.863		
		柔らかい—硬い			フォーマルな—カジュアルな			若々しい—年寄りっぽい			暖かい—冷たい		
デザイン	A	-0.049		0.085	0.077		0.135	-0.031		0.048	0.010		0.012
	B	0.049	0.097	0.222	-0.077	0.153	0.351	0.031	0.061	0.142	-0.010	0.020	0.161
きもの の色	v 2	-0.022		0.913	0.126		0.797	0.194		0.804	0.904		0.977
	v 8	0.030			-0.804			0.317			0.021		
	v18	-0.670	1.590		0.031	1.407		-0.381	1.415		-1.021	1.965	
	lt 2	0.920			0.043			0.642			0.944		
	w	-0.258		0.925	0.603		0.911	-0.773		0.922	-0.848		0.986
袴の色	dk 2	0.092		0.137	0.106		0.465	0.135		0.488	0.139		0.135
	dk 8	0.061			-0.451			-0.533			0.087		
	dk12	-0.096	0.188		0.119	0.677		0.190	0.740		-0.109	0.257	
	dk18	-0.057		0.345	0.226		0.791	0.207		0.822	-0.118		0.634
重相関係数		0.927			0.933			0.941			0.986		
重相関の2乗		0.860			0.870			0.886			0.973		
		男性的な—女性的な			上品な—下品な			都会的な—田舎的な			好きな—嫌いな		
デザイン	A	-0.028		0.039	0.045		0.068	-0.032		0.093	-0.017		0.026
	B	0.028	0.056	0.169	-0.045	0.089	0.198	0.032	0.063	0.212	0.017	0.034	0.074
きもの の色	v 2	-0.630		0.958	0.149		0.763	-0.157		0.290	0.250		0.748
	v 8	0.244			-0.939			-0.056			-0.777		
	v18	0.902	1.855		-0.044	1.363		0.076	0.278		-0.262	1.435	
	lt 2	-0.953			0.411			0.016			0.658		
	w	0.437		0.973	0.424		0.915	0.121		0.559	0.131		0.905
袴の色	dk 2	-0.209		0.173	0.151		0.547	0.072		0.850	0.137		0.562
	dk 8	0.115			-0.615			-0.490			-0.622		
	dk12	0.065	0.324		0.172	0.907		0.188	0.720		0.162	0.944	
	dk18	0.029		0.606	0.292		0.852	0.230		0.892	0.322		0.848
重相関係数		0.974			0.942			0.903			0.936		
重相関の2乗		0.948			0.887			0.815			0.876		

3) 数量化Ⅰ類による分析結果

着装イメージに関与する要因について、イメージごとに検討するために、きもの柄、きもの色、袴の色をアイテムとして数量化Ⅰ類により検討した結果を表5に示した。

12形容詞対の偏相関係数から、どのイメージにも柄の影響はほとんど認められず、きもの色や袴の色の影響の方が大きい。特にきもの色が大きく関与しているイメージに「派手な—地味な」「個性的な—平凡な」「重い—軽い」「柔らかい—硬い」「暖かい—冷たい」「男性的な—女性的な」などの6形容詞対があげられる。また、「着てみたい—着たくない」「フォーマルな—カジュアルな」「若々しい—年寄りっぽい」「上品な—下品な」「好きな—嫌いな」についても最も大きく影響している要因はきもの色であるが、袴の色の偏相関係数も0.8前後の比較的高い係数を示しており、袴の色も合わせて影響していると考えられる。なお、袴の色の方が大きく影響するイメージは因子分析の結果第3因子に単独で出現した「都会的な—田舎的な」のみであり、そのカテゴリー数量から「都会的な」にはdk18が、「田舎的な」はdk8が影響するといえる。

きもの色の影響が大きい形容詞対について、そのカテゴリー数量をみるとv8が「派手な」「個性的な」「軽い」「着たくない」「カジュアルな」「下品な」「嫌いな」に寄与しているといえる。これらのイメージは「軽い」を除き全て因子分析の結果、第1因子に分類された形容詞対ばかりであり、第1因子における因子得点結果を支持するものであった。また、lt2も多くのイメージに関与しており、「平凡な」「着てみたい」「柔らかい」「若々しい」「暖かい」「女性的な」「好きな」などがあげられ、好印象に繋がるイメージが多いといえる。v18は寒色系の色彩であることから「重い」「硬い」「冷たい」「男性的な」に、wは「地味な」「フォーマルな」「年寄りっぽい」「上品な」に寄与している。

なお、決定係数ともいえる重相関係数の2乗値は「個性的な—平凡な」で0.790と若干低いもののその他の形容詞対では0.80以上の値を示しており、分析結果は有効なものといえる。

要 約

日本の民族衣装であるきものと袴を取り上げ、若い女性を被験者としてアンケート調査および官能検査を行い、着装イメージに関与する要因を検討した結果、以下のような知見を得た。

アンケート調査から、卒業式に和服を着用したい人が94%と非常に多いもののレンタル又は親や知人から借りる人が多く、和服に対する合理性が窺えた。嗜好色では1位に黒が、その他高明度・高彩度色が上位に挙がった。また、着たいきもの色も赤・黒・白などが挙がり、洋服感覚で捉えている傾向がみられた。

官能検査結果をもとに因子分析を行ったところ固有値1.0以上で「品格・評価性の因子」「活動・力量性の因子」「都会性の因子」の3因子が抽出された。その因子得点から「品格・評価性の因子」にはきもの色彩の彩度が、「活動・力量性の因子」には暖色・寒色などが影響し、「都会性の因子」には袴の色彩が関与することが判明した。

また、数量化Ⅰ類により、柄、きもの色、袴の色の何れがイメージに関与するかを検討した結果「都会的な—田舎的な」のみ袴の色が影響しているが、他のイメージはきもの色の影響が大きく、特に鮮やかな黄やピンクが大きく関与することが明らかになった。

文 献

- 1) 日本風俗史学会：日本風俗史事典，507～509，弘文堂（1979）
- 2) 川上梅：情報伝達量による再現・再再現時の服装イメージ評価—女子大生の振袖模様に対する感情—，繊維製品消費科学会誌，45，11，27～35（2004）
- 3) 岩下豊彦：SD法によるイメージの測定，63～104 川島書店（1987）
- 4) 神谷綾子・石原久代：振袖の着装イメージに關与する色彩要因，（社）日本家政学会中部支部発表要旨集，33（2006）